

富山県から入植した開拓農家の3代目。父要吉さん(昭和42〜43年ごろ、80歳で逝去)、母キヨさん(平成2年、83歳で逝去)の12人兄弟の二男として東川村東2号北34番地(当時)で生まれました。厳しい生活の中で幼少の兄弟姉妹3人が次々と早逝し、第二尋常小学校高等科を卒業後、実質長男として2町5反(2・5畝)を耕作し、冬期は冬山造材で一家を支えたそうです。

「親父がやっつたから、後継いでやっただけけれど、バチ挽きで切った丸太を受け取って、正月に小西木材に運搬せにゃならん。親父は優秀で、頑張るほうだったけれど、オレは結婚して29歳で辞めた」と厳冬期も厳しい仕事に明け暮れたそうです。

東1号の清水家から2歳年下の百合子さん(昭和52年、47歳で逝去)と25歳で見合い結婚。30歳の時、弟の分家のために、と購入した現在地に自ら分家して2町(2畝)の水田を耕すことを決断したそうです。

「家族が多くなつたから、長男が先に出たほうが良いと思つてさ」と、夫婦の新たな苦勞が始まりました。

「その時は水田もなかったから、何したらいいか、とエ



ンドウ豆植えて、マメ、カボチャ、トウモロコシ作つてたな。水田も作つたけれど小さかったから、金稼ぐのに必死だったさ」と冬は一度辞めた冬山造材の丸太運びの仕事をし、早朝から夜遅くまで働いたそうです。

1963(昭和38)年からの町内農地整備事業のころには、すでに養鶏で生計を立てていました。自ら鶏舎を建て、多い時には5千羽以上飼育したそうです。「1年に1棟ずつ、3つも4つも建てたさ。でも鶏が風邪ひくと卵産まなくなるし大変だった。辞める人がいっぱいいたよ。でも町内で一番遅くまでやったな」と養鶏を10年間続けました。

「1万羽養鶏までやろうね」と夫婦二人三脚の仕事に張り合いがあった時代。しかし9年目に入って、妻の百合子さんが体調を崩し旭川市内入院。回復を祈り毎日見舞いに出掛けていました。しかし1年後に急逝。それを期に養鶏も辞めることに。

「農協(旧北立農協)も力入れてくれたから、大分助かったんだよ。良い時代だったな」と懐かしく振り返りました。

俳句

冬ごもり俳句は時のつつかえ棒
 ご先祖の雑煮下げきていただきまする
 額掛ける母の描きし福寿草
 きみは湯婆だねと笑うひとりありぬ
 松明けてクロワッサンとルイボスティー
 七年目復興酒開け年迎う
 三つに分けねじりねじあげメ飾り
 初鏡笑いしわなら良しとして
 元旦や船旅へ出る佳いや酔い
 ジーパンが正座しているお元日
 小春日や里に馴染みの置き薬
 初明り生きてゆきますまた今年
 海峡を越えて娘の初電話
 初夢や出でし男の名言えずして
 幸せを願える幸せ初光
 湯婆を父母に作つて今日終う

高瀬 潤
 石澤 清宏
 三島 智
 若田 郁
 本田 咲
 佐々木 りえ
 斎藤 夕桜
 山内 みゆ
 由川 真人
 小林 ろば
 杉山 ひろのり
 保科 なほ
 徳光 吐苦
 杉山 りつ
 こばやし 星来
 横田 則子

